

## 人間シュヴァイツァー

### まえおき—出会い

私がアルベルト・シュヴァイツァーに出会ったのは、『人間シュヴァイツェル』（岩波新書、1955年8月刊、本稿の表題はこれを借用した）という本においてであった。買い求めたばかりのこの本を、所用で北海道へ行く夜行列車の中で読みふけたことを覚えている。著者野村実（1901～96、医師）は、その前年アフリカのランバレネにシュヴァイツァー博士を訪ね、5か月にわたってその病院で働き、帰途ノルウェーのオスロで博士のノーベル平和賞受賞記念講演を聞いて帰国した。本書はその旅行記に彼の「小伝」を合わせたものだが、シュヴァイツァーの「豊かな人間性」が見事に描き出されている。

人間関係を語って、シュヴァイツァーは言う。

わたしたちは、互いに相手の顔形をはっきり見分けることのできない薄暗がりの中を、一緒に歩いているのだ。ただ時折、わたしたちが道づれと何かを経験したり、互いに言葉を交わしたりすることによって、一瞬の間いわずまに照らし出されたように、わたしたちのそばにその道づれのいることがわかる。

人生の「出会い」とは、このようなことを言うのであろうか。私もまた薄暗がりの人生の歩みの中で、折々に、いわずまに照らし出されたように、自分の大切な道づれとしてシュヴァイツ

ァーがいることに、感謝と喜びを見出してきた。

私は青山学院大学で一般教養の英語の講師を勤めたが、シュヴァイツァーの『わが幼少年時代』や『わが生活と思想より』のような自伝的文章の英訳本を、しばしばテキストに使った。これらの著作の中で、私どもは「人間」シュヴァイツァーに出会うとともに、「人間形成」について実に貴重な数々の示唆を与えられる。以下は、クラスの中で学生諸君と共に学んだことの一端である。

### 恥ずかしさ

シュヴァイツァーは1875年1月14日にアルザスのカイゼルスベルクに生まれた。生後間もなくギュンスバッハに移り、「貧しくもなく裕福でもない」牧師の家庭で、平和で幸福な幼少年時代を過した。

<ごく小さかった子供のころの思い出>の一つに、次のようなことがあった。まだベビー服を着ていたころのある日、彼はミツバチに刺された。その悲鳴に家じゅうの者がかけつけ、女中は彼を抱きあげてあやし、母は父親の不注意を責めた。彼はこの災難のおかげで皆にちやほやされ、いい気になって泣きつづけた。そのうち、もう痛みを感じなくなっているのに、なおも泣きつづけている自分に気付いて、<われながらうしろめたくて、何日もそのために心が楽しなかつた>という。これは彼が<はじめて意識的に自分自身をはずかしく思った事件>で、

その後おとなになってから、<身にふりかかったことを仰山に見せようとする誘惑にかられたとき>、何度も彼をいましめてくれたと述懐している。

こうした経験は、多くの人にとってはやっとな青年期になってからのものだろうが、シュヴァイツァーの場合は幼年期というから驚く。彼はまた、こうも言っている。

(人間には) 肉体的な恥ずかしさばかりでなく、精神的な恥ずかしさもあるのであって、わたしたちはこれを尊重しなければならない。魂もおのれの殻を持っているのであって、これをはぎとるべきではない。

この羞恥の感覚こそ人間であることの根源的な意識であり、個で在ることから個に成ること、すなわち、自分を突き放して客観視しようとする「個の自覚」と言ってよいだろう。ここに自省と自律と自負が生まれ、「人間としての悲哀」を知る心が育まれる。

いつまでも「甘えの構造」の中にどっぷりと浸かっている日本人にとって、これは得難い人間形成論ではないだろうか。私どもが、戦争といえば被害者としてしか考えることができず、自分の加害責任には思いも及ばない、偏狭で固陋な愛国心から自分の国の負の歴史にまともに向き合うこともできないでいる、などは正にその典型的な一例であろう。

## 個人の価値

中学・高校を経てストラスブール大学に進んだ21歳の5月のある朝、シュヴァイツァーは<自分は30歳になるまでは学問と芸術のために生きる権利があると考えよう、それからあとは人間への直接の奉仕に一身をささげよう>と決心した。8歳の時に習い始めたというオルガンでは、演奏者としてはもちろん、その製法と芸術、さらにはバッハの研究者として既に名を成し、哲学者・神学者としては今日なおその学問的価値の失せない『イエス伝研究史』の著者であり、大学の講師、教会の牧師を勤めていた彼は、30歳になった時それらのすべてを断念し、改めて医学を修めて医師となり、ヘレーネ・ブレスラウと結婚して、1913年<原始林に医者となる>べくランバレネに赴き、黒人のための病院を開いたのであった。

以後1965年9月4日かの地に没するまで、14次半世紀にわたって黒人のための医療に従事し、傍ら学問と芸術も中断することなく、思索と研究を重ねて、その成果を著述した。アフリカ滞在中にも幾度となく渡欧して講演し、演奏会を催し、出版を行って、病院経営の資金とした。

顕著なことは、シュヴァイツァーはこれらの事業を、いずれかの団体に所属してでなく、若き日に希望した通りに、<完全に個人的で独立した活動……究極的には個人として自由人として献身できる仕事>として行ったのであった。<個人的で独立した>が彼の生涯を一貫する特徴で、彼はその思想においてもその行為においても、つねに自由人として振舞ったのである。

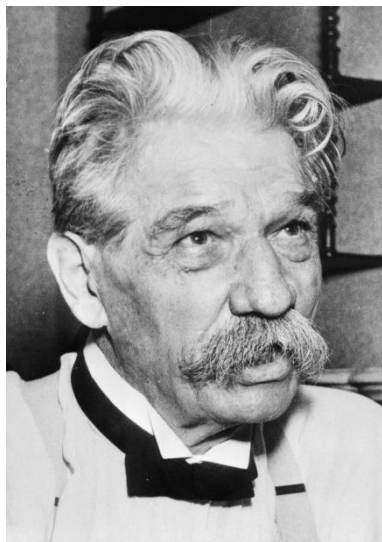
それはその著『文化哲学』の中で述べているように、<個人の精神的倫理的価値>を何より

貴重としたからである。彼は言う。

集合体が個人に対して、後者が前者に働きかけるよりも強く働きかけると、（文化の）没落が起る。というのは、それによって個人が一番大切な値打ち、つまり個人の精神的価値が必然的に傷つけられるからである。……わたしたちはこういう事態の中にあるのであるから、めいめいが高度の自律性を取戻して、精神的倫理的な思想を生み出すという、個人だけが果すことのできる任務を、再び引き受けるようにしなければならない。

### 生命への畏敬—原体験

シュヴァイツァー夫妻がアフリカへ渡って間もない翌1914年、第一次世界大戦が勃発し、夫妻は捕虜軟禁の身となってしまった。この思わぬ比較的自由な生活の中で、彼は中断されていた文化の問題に取組み、思索と研究を続けた。そして1915年の8月、オゴウェ河をさかのぼる長い旅行の途中、くちょうど日没のころ、カバの群れの間を舟が進んでいた時、突如、それまで予感もしなければ求めたこともない、「生への畏敬」という言葉が心にひらめいたのであった。それは彼にとって、<世界・人生肯定と倫理がともに包含される理念に到



達した>出来事であった。そして、以後ただこの一語に彼の生は集中することになるのである。

そこで「生命への畏敬」とは何かを考えなければならないが、その前に、恐らくこの言葉が彼の心にひらめくに至った長い探求の端緒となったと言うべき、幼少年時代の彼の二つの話を聞くことにしよう。

幼年時代、虐待される動物たちを見て心を痛めていたシュヴァイツァーは、夕べの祈りの時母親が教えてくれた祈りが人間のためだけであることに納得がいかず、お休みのキスをしてもらったあとに、いつもこっそり祈りをつけ加えた。<愛する神様、すべての生きものを守り、恵み、すべての悪から防ぎ、安らかに眠らせてください>。

7つか8つになった春のある日曜日の朝、彼は友だちのブレッシュに鳥打ちに誘われた。相手に笑われはしないかと心配で、断る勇気がなかった。パチンコに小石をはさんで引きしぼったその時に、教会の鐘が鳴り始めた。彼はパチンコを放り出して家へ逃げ帰った。鐘の音は彼の心中に「なんじ殺すなかれ」という戒めを呼びさましたのであった。

わたしはこの日から、敢然として、人を恐れる気持ちから解放された。……殺したり苦しめたりすべきではないという戒めは、このようにしてわたしの心に働きかけたのであって、これが私の幼年時代と少年時代を通じての大きな体験である。これにくらべれば、他の一切の体験は影が薄い。

「生命への畏敬」が、真直ぐにこれらの体験

の延長線上にあり、単純素朴ながら、これらの体験が「生命への畏敬」の思想と倫理のすべてを包含していることは疑い得ないところだろう。

### 生命への畏敬—生への意志

「生命への畏敬」とは何か。それは、いかにして私どもの中に生じるのか。

シュヴァイツァーによれば、＜人間の意識の最も直接的な事実は、「わたしは、生きようとする生命にとりかこまれて、生きようとする生命である」ということである。自分および自分のまわりの世界について考えるあらゆる瞬間に、人間は自分を、「生への意志にとりかこまれた生への意志として把握する」のである＞という。

この根源的事実に対して、人間は自分の態度決定を迫られる。自分の「生への意志」を肯定するのか、否定するのか。そして、＜人間は自己の「生への意志」を肯定して（「生命への畏敬」がうちに生じて）はじめて、自然にして真実な生き方をする＞のである。その生き方について彼はこう言っている。

生の肯定とは、漠然と生きることをやめ、自分の生命に畏敬の念を抱き、これに帰依して、その生命を価値あるものとする、という精神的行為である。生の肯定とは、「生への意志」の深化・内面化・高揚である。

こうして自分の「生への意志」を肯定した人間は、当然のことながら、あらゆる「生への意志」に対して、自分のそれに対してと同様な「生命への畏敬」の念を抱かざるを得ない。＜か

れは他の生を自分の生のうちに体験する＞のである。その時、

かれにとって「善」とは、生を保持し、生を助長し、発展可能の生をその最高の価値にまで到達させることである。悪とは、生を否定し、生を毀損し、発展可能の生を抑圧することである。これこそ、道徳性の絶対的根本原則であり、思索の必然的結果である。

ここに至って、「生命への畏敬」は倫理となる。

### 生命への畏敬—倫理

しかし、ここに「生命への畏敬」がはらむ大問題がある。＜現世は「生への意志」の自己分裂の恐るべき舞台と化している。ひとつの存在は他の存在を犠牲にしてはじめて確かな地歩を占め、ひとつは他を破壊する＞という残酷な事実である。しかも、＜人間もまた、「他の生命を犠牲にして生きなければならず、その結果、生命の破壊と毀損とによって絶え間なく罪を身に負う」という、不可解にして恐るべき法則に縛られている＞という苛酷な現実である。

この大矛盾に対して、シュヴァイツァーの言うところは、こうである。

しかし人間は倫理的な存在として、この必然性からできうるかぎり逃れ出て、知識と慈悲の心とを得たものとして「生への意志」の自己分裂を、かれの存在の影響のおよぶ限り、破棄しようと努力する。

人はひとたび「生への畏敬」の倫理を奉じた以上、何としてもやむをえない場合はいざ知らず、どんなことがあろうと無思慮から、生命を傷つけ、滅ぼすことだけは決してしない。自由人であるかぎり、かれはあらゆる機会を求めて、生命を扶助して生命の苦しみと破滅とを除去する、という至福を味わうのである。

ここで「生命への畏敬」の倫理に特徴的な二点を指摘しておこう。一つは、「生命への畏敬」の倫理においては、生命は人間だけでなく動物・植物のそれも含むすべての生命である、とすることである。シュヴァイツァーは、＜生命に、客観的に妥当する価値の区別はない。どの生命も神聖である＞とし、従って＜倫理とは、なべて生きとし生けるものへの、無辺際に拡大された責任である＞と言う。ここに幼年時代のあの祈りが反響している。

もう一点は、「生命への畏敬」の倫理は本質的に＜献身＞の倫理たらざるをえない、ということである。彼は言う。

この倫理は、すべての人びとがその生命の一端を人びとに捧げることを願う。どのような仕方で、どのような程度に、それがかれに課せられているかは、各人が自分の中に生ずる思想と、自分の人生をめぐっている運命からくみとらなければならない。……善が実現されるために、人間の使命は千差万別の遂行を見なければならぬ。何を提出すべきかは、各人の秘密である。

恐らく現代ほど人間が「いのち」に関心を寄せた時代はないだろう。「生命を大切に」と声高に叫ばれる一方で、戦争や残虐行為などによる生命の無視があり、遺伝子医療やクローン技術などに見られる生命の操作がある。その中で、私どもは以上見てきたようなシュヴァイツァーの所論が、こんにちの生命に関する諸問題の殆どに触れていることに驚く。それは「生命倫理」に止まらず、地球環境をはじめとする広く文化・文明の諸問題に関わって、私どもの思索と行動に多くの教示を与えている。

### 内面的な人間

シュヴァイツァーはある時ひとりの母親に、その若い息子が＜内面的な人間に成長されますように＞と書き送っている。「内面的な人間」とはどのような人間を言うのか。当の彼自身がそれであることは確かだが、そうであるからこそ、少年時代＜内気で無口だった＞、万事に＜控え目＞な彼は、自分の内面について必ずしも多くを語らない。

その彼が、『わが幼少年時代』のエピローグでは、「内面的な人間」の秘密を珍しく雄弁に語っている。ここでは専ら彼の言葉を聞くことにしたい。

一般に人間と人間の関係のなかには、わたしたちが通常認めているよりも、はるかに多くの神秘がひそんでいるのではないだろうか。何年も前から毎日一緒に暮している相手であっても、本当にその人を自分が知っているとは、わたしたちの誰も主張するわけにはいか

ない。わたしたちはどんなに親密な人たちにも、自分の内的体験をつくりあげているものの断片しか伝えることはできないのである。  
……

わたしたちが互いに神秘であるというこの事実を、わたしたちはそのまま受け入れなければいけない。互いに知りあうということは、互いに相手のことをなにもかも知りつくすということではなく、互いに愛と信頼とを抱きあい、互いに信じあうことである。人は他人の本質のなかへ入りこもうとすべきでない。  
……

わたしたちはみな、わたしたちの愛する人たちが、その心のすみずみを必ずしも覗かせてくれなくても、わたしたちに対する信頼が足りないなどと、非難しないように注意しなければならない。実際わたしたちは親しくなればなるほど、いよいよ互いに神秘になってくる。他人の精神的本質に対して畏敬の念を抱く者だけが、本当に他人に感化を及ぼしうるのである。

だから、無理して自分の内面的生活を、不自然なほど多くあらわにしようとすることも、すべきではないとわたしは思う。他の人たちにわたしたちの精神的本質をぼんやり感じさせ、わたしたちは他の人たちのそれをぼんやり感じるだけしか、わたしたちにはできないのだ。ただ一つ重要なことは、わたしたちが自分の内部に光を絶やさないように努力することである。努力していれば、互いにそれとわかるものであり、内に光があれば、外にあらわれるものだ。……

## 人に関わる権利

「内面的人間」は決して内向的、自己中心的人間のことではない。自分の精神的本質に深く沈潜するだけ、それだけ他人のそれに畏敬の念を抱く、開かれた人間性の持ち主である。シュヴァイツァーは言う。

人が人に対して完全にいつまでも無縁であるなどということは決してない。人と人とは関わりあっている。人は人に関わる権利を持っているのだ。……控え目の法律は心情の権利によって打ち破られ、わたしたちはみな無縁の状態から抜け出して、人と人との関係に入るようになるのである。

<たぐいなく幸福な少年時代>を過ぎたシュヴァイツァーに大きな悩みがあった。それは、友だちと取っ組みあいをして勝つと、お前は週2回も肉のスープを食わせてもらっているからと言われたり、村の少年たちの誰ひとり着ていない冬のマントを着せられて「ぼっちゃん」呼ばわりされたりする苦痛であった。彼はまた、コルマルの町へ出る度に公園にある黒人の石像を見に行った。その悲しげな表情に<ひどく心をひかれ>、アフリカの暗黒に思いを馳せるのであった。

こうして<はっきりもの心がついて以来、世の中に多くの不幸を見て、悩みつづけてきた>少年は、<幸福を受ける権利の問題>に直面せざるを得なくなり、それは彼の人生観とその生涯とを決定することになるのである。

自分は自分の幸福な少年時代と健康と活動力とを、自明のこととして受けとる内面的な権利を持っていないということが、わたしにはだんだん明らかになってきた。……人生において多くの美しいものを手に入れた者は、その代りにやはり多くのものを提供しなければならない。自分の苦悩をまぬかれた者は、他人の苦悩を軽くしてやる責務を感じべきである。わたしたちはこの世に存在している不幸の重荷を、みんなと一緒に担わなければならない。

これはヨーロッパ人の持つ「ノーブレス・オブリージュ（特権は責任を伴う）」という考え方に通ずるものと思われるが、シュヴァイツァーのアフリカ行きに、この意識が働いたことは十分に考えられるだろう。

### 行為の人・実践家

子供はみな心をときめかせて学校にあがるものだが、シュヴァイツァーはそれを少しもうれいことと思わず、父親に連れられて初めて学校へ行くみちみち泣きつづけた。〈夢もすばらしい自由もこれで終わりになるのだと感じたからだ〉。そしてその後もこの感じは、〈新しいものからくる美しい外観のために、ごまかされることは決してなかった。いつもわたしは未知のものへ空想を抱かないで入っていった〉と彼は言っている。

周囲の反対を押し切ってアフリカへ出かけた時も、彼は何の空想も抱かずに〈この冒険〉に入ってしまった。

わたしは、この冒険は正当であるとみなした。なんとなれば、わたしは長い年月、あらゆる面から熟慮して、健康、平静な神経、精力、現実的感覚、堅忍不拔さ、分別、無欲、そのほかこの理想の遂行のために必要なものをすべて持っているとの自信があったし、また、そのうえ計画が万一失敗したさいにも、それに耐えるのに不可欠な性情をも備えている、という自信があったからである。

この言葉の申に、「行為の人」シュヴァイツァーが躍如としている。

シュヴァイツァーは膨大な数の手紙を書いたが、そのごく一部が『書簡集』として刊行されている。特にその中に現れ出るこの行為の人は、当然のことながら、またすぐれた「実践家」である。彼は文化としての〈手仕事〉を重んじ、アフリカ人同僚たちと共に、自ら農作業、建築、土木工事などにも精を出した。

印象に残ったことの一つに、彼の金銭感覚がある。ものを注文する時には必ず支払いの方法を確認し、彼の病院を訪問する人にはどれ位のお金をどのようにして持ってくればよいかを教え、自著の印税について、その税金との関係に至るまで配慮し、病院の経営者として為替相場にまで注意している。金銭に無頓着（であるべき）という日本人の偉人観からは遠いが、この偉人は実に「細心な」実践家であった。

医者になることを選んだのも、それが〈なんら弁舌をろうせずすむからであった〉というシュヴァイツァーは、〈直接に人に仕える〉仕事を、〈愛の宗教に関する説教の形でではなく、

その純粹の實踐という形でしか考えることができなかつた>のである。

## 平和達成の道

7歳のころシュヴァイツァーは、こんな経験をした。隣村にマウシェというユダヤ人が住んでいた。彼は小売商人で、ろばに荷車を引かせて時々ギュンスバッハにやって来た。当時は村にユダヤ人が住んでいなかったの、村の少年たちはいつも彼のあとを追いかけて、からかった。シュヴァイツァー少年も仲間に加わり、皆と一緒に「マウシェ、マウシェ」とはやしたてながら、村はずれまでついて行った。そばかすと白ひげのマウシェは、それでもゆうゆうと歩きつづけ、時折うしろを振り返ってはく当惑げに、そして優しく>、彼らの方へく微笑をくれた>という。

この微笑にわたしは圧倒されてしまった。迫害の中にあつてじつと黙っていることがどんなことであるかを、わたしはマウシェからはじめて学んだ。彼はわたしに赦しを教えてくれた最初の先生であつた。……こんにちでもなおわたしは、腹が立って暴れたいくなるような時には、いつでも寛容の微笑を浮かべているマウシェのおかげでがまんすることができる。

この経験に、前述した「パチンコ事件」の教訓、すなわちく考えもなく苦しめたり、殺したりすることが、どんなに恐ろしいことであるかを、わたしたちみんなが痛感しなければならな

いという信念>と、その信念をもって行動したとき、他人からそれをくセンチメンタルだと非難されることを決して恐れないという誓い>を合わせれば、そこにシュヴァイツァーの平和思想は尽きていると言ってよい。

シュヴァイツァーは1952年度の「ノーベル平和賞」を受賞した。54年11月ノルウェーのオスロで行われた受賞記念講演で、彼は「現代における平和の問題」（演題）を論じ、くわれわれは過去の両大戦において、恐しい非人間性の罪を負つた>と指摘し、く平和達成の問題の解決は、戦争を倫理的理由一戦争はわれわれを非人間化するゆえに一から拒否することによつてのみ可能であるという信念>を披瀝したのであつた。さらに57、58年には、オスロ放送局を通じ全世界に向けて、核実験の中止を訴える長文の声明（のちに、『平和か原子戦か』）を放送した。

このように、戦争と平和の問題を、政治の課題としながらも、すぐれて人間性と倫理の問題として考えた彼は、その著書『わが生活と思想より』を次の言葉で結んでいる。

行為の人としてであれ、忍苦の人としてであれ、一切の理性を超越する平和へと邁進する人間の力を示すことこそ、われわれの義務なのである。

## イエスの目配せ

前節さいごの引用「一切の理性を超越する平和」（「あらゆる人知を超える神の平和」新共同訳）は「フィリピの信徒への手紙」4章7節による



もので、シュヴァイツァー特愛の聖句の一つという。彼は8歳で父から新約聖書を与えられ、熱心にそれを読んだ。

教会へは4歳の時から一緒に連れていかれたが、そのおかげで、〈おごそかなものにひかれる気持ち、それから静寂と心の落ち着きを求める心を身につけた〉。彼は、〈この二つをぬきにしては自分の生活を考えることができない〉と回想している。

シュヴァイツァーがランバレネ行きを決意した直接のきっかけは、たまたま彼の机上にあったパリ宣教師協会の会報を見たことであつた。宣教師募集の一文の結びにこうあつた。

「教会は求めている、主のめくばせに応じて、直ちに、主よ、われ従わん、と答える人びとを。」これを読みおえると、わたしは静かに仕事にとりかかった。摸索は終わったのである。

このように、シュヴァイツァーがアフリカへ行ったのは、端的に〈イエスの精神に命じられたから〉であるが、さらに具体的には、ヨーロッパ人がアフリカ人にもたらした苦悩に対する、彼自身の贖罪意識によるものであつた。

結局われわれが植民地の民族に対して示す善行はすべて、慈善ではなく、むしろわれわれ白人の船がかれらの岸べに到る航路を見つけた日以来、われわれがかれらの上にもたらした数々の悪の償いである。

シュヴァイツァーの思想の中心はイエスであり、彼の生涯は一貫してイエスの自配せに応じて歩んだそれであつた。徹底してイエスに信従し、〈内面的キリスト教〉に生きたシュヴァイツァーが、自ら〈わたしの信仰告白〉と称した、『イエス伝研究史』の結語は次のように言う。

湖のほとりで、彼がなにびとであるかを知らなかつた人々に近づいて行ったように、彼はわれわれにも知られざる、名なき者として近づいて来る。彼は同じ言葉で語りかけてくる。「あなたは、わたしについて来なさい」と。そして、彼がわれわれの時代において遂行しなければならない課題の前に、われわれを立たせる。彼は命ずる。そして彼に従う者には、賢い者にも、愚かな者にも、平和、活動、戦い、苦しみによって体験される彼との交わりにおいて、自らを啓示する。かくしてこれらの人々は、言い表しえない奥義として、彼のなにびとであるかを体験するであろう。

#### むすびー14歳の心

『わが幼少年時代』において、最初に学んだことは「個（おとな）に成ること」であつた。その最後において私どもが教えられることは、一見その正反対に見える次の勧めである。

わたしたちはいつでも少年の頃と同じように考えたり、感じたりすることに一生涯努力しなければならない。……わたしは世間で「成熟した人間」と考えられているものになることに、本能的に抵抗した。

少年期の理想主義の中にこそ、人間にとっての真理は認められるのであり、少年期の理想主義こそ何ものとも代えてはならない人間の富なのである。

だからして、わたしたちおとなが若い人たちに伝えるべき人生知は、「現実はず必ず君たちの理想を切り崩してしまうだろう」ではなくて、「君たちの理想に生きぬき、生活によってそれを奪い取られないようにせよ」である。

もしもわたしたちが14歳当時の人間になるならば、世の中は全く面目を一新してしまうだろう！

今から4分の3世紀も前に、シュヴァイツァーは<わたしの認識は悲観的であるが、意欲と希望とは楽観的である>と言って、その確信をさらに次のように述べている。

現代においては、暴力が虚言の衣装をまとって、かつてなかったほどに気味わるく世の中に君臨しているけれども、わたしは依然として、真理、愛、寛容、温厚、親切があらゆる権力にまさる権力であると確信している。十分な数の人間が愛、真理、寛容、温厚の思想を十分純粹に強力に変えることなく考え生きていきさえしたならば、世の中はそうした思想の手に帰するだろう。

そして彼は、この確信をもって今もなお私たちに呼びかけている。

14歳の心をもって生き給え。人間の使命は日ごとに、より人間的になることである(のだから)。

引用(文中<>)は、すべて『シュヴァイツァー選集』(殆どは1と2、白水社刊)による。(2000年1月記)

(所載)

青山学院大学プロジェクト95編

『青山学院と地の塩たち—建学の精神と21世紀への祈り』(2001年9月)